

拗音から考える外国語音への感性

－日本語音のレパートリーは増えるのか－

福居 誠 二

今年度をもって主な経歴である言語教育に一区切りをつけることとなった。教育に携わった言語はデンマーク語、日本語、スウェーデン語、英語である。これらの言語のどれが主で、どれが従であるかは自分では判断がつかない。生活を支えるのに最も役立ったのは英語であろうが、即それが自分の中で一番大きな位置を占めていたとは言えない。今の仕事に導かれたのはデンマークで指導を受けた音声学、つまり言語音の科学である。

ことばの発音に興味を持った第一の理由は中学時代に転校先の英語の先生の発音から受けたショックである。どこの学校かは伏せておくが、その先生の発音が変であるという印象が、単にその土地に対する気持ちから出ているのではないことを納得したいために、辞書の発音表記をよりどころにしたのである。当時は教科書付属の録音教材などはなかった¹⁾。

発音への関心とともに、英語以外の言語への興味も出てきた。中学時代にドイツ・リート、カンツォーネ、ラテン語聖歌に出会い、その歌詞の意味や発音を知りたいと思った。特にドイツ語は高校の英語授業のつまらなさをまぎらわせるために独学でかじった²⁾。同じラテン文字での表記でも言語により、また方言により様々に発音することに興味が沸き、その音声を表記する手段としての IPA (International Phonetic Alphabet いわゆる発音記号) への関心にもつながった³⁾。高校の図書館にあった「音声学」服部四郎 1951 (岩波全書) を読んだりもした。当時の高校生が使っていた英語の辞書の定番は三省堂コンサイス英和辞典 Concise English Japanese Dictionary で、発音表記は IPA 準拠の簡略表記であった。簡略ではあるが英国発音/米国発音が併記され、また巻頭には発音の凡例として英語音以外の、外国語由来の発音例も掲載されていたと記憶している⁴⁾。三省堂コンサイス独和辞典 Neues Concise Deutsch-Japanisches Wörterbuch でも巻頭に発音の解説があり、英語と日本語にある近似音の例を紹介している。それでもかなり簡略な表記で、「同じ発音なのに違う記号でいいのか」「違う発音なのに同じ記号でいいのか」などの疑問を感じていた。

高校卒業後の進路について悩んだ覚えはない。言語あるいは音声の研究が面白そうなので、それができるところを探した。ドイツ語やフランス語などはどこでも勉強できるし、なにかユニークなものだと探したところ、1966年に大阪外国語大学⁵⁾にデンマーク語学科ができた。デンマークといえば音声研究で著名な言語学者 Otto Jespersen の国である。68年にここへ入学した。2年生になった69年から70年にかけては大学紛争のためまともに授業は行われず、ほんの数週間の授業やレポートで進級するのがどうにも我慢ならず、アルバイトの後一年間休学してデンマークへ渡った。デンマークでは Folkehøjskole (全寮制国民高等学校) の Sproghøjskolen på Kalø とコペンハーゲン大学併設のデンマーク語コースでデンマーク語

1) あったのかも知れないが、音声の記録媒体は円盤レコードか録音テープしかなかったし、教室に再生装置がある、ということもまだまだの時代であった。

2) 高校の英語授業のつまらなさは、成績が伸びなかったからだと思う。

3) 以下文中で発音記号を用いるが、次の URL には IPA の発音記号のチャートがあり、該当記号をクリックすることで音声を聞くことができる：

<http://www.internationalphoneticalphabet.org/ipa-sounds/ipa-chart-with-sounds/>

4) 現物は留学中にたばこの巻紙となり、文字通り煙となって消えてしまった。

5) 現大阪大学外国語学部

を学んだ。大阪外大に復学後、4年次には間瀬英夫教授の指導を得てデンマーク語の文字 d の発音をテーマに卒論を仕上げ、卒業を控えた73年にデンマーク政府奨学生試験を受け、74年9月より3年間コペンハーゲン大学音声学科にて総合科学としての音声学を学んだ。ここでの指導は厳しいものであったが学びは多岐⁶⁾にわたり、実り多いものであった。

77年6月に健康の理由で帰国、78年から大阪外大で非常勤講師としてデンマーク語音声の指導を始めた。その後デンマーク語、スウェーデン語・同音声、留学生への日本語音声指導、他大学などでの日本語教育方法、英語教育などをレパートリーに加え、1985年に聖和大学短期大学部英語科講師、同大学人文学部教授を経、2008年本学人間福祉学部に着任した。前任校では国際協働教育の一翼としてネパールでの国際協働、幼児教育普及フィールドワークなどに携わった。また留学生への日本語音声指導に長くかかわってきたが、いつも指導の第一歩として取り扱ったものを最終講義の題材にする。

ことばと文字

ことば：はなしことば、あるいは音声を持たないことばもある

文字：ことばを（2次元の）図形で記録するもの

ピクトグラム：Aztec Codices⁷⁾

表意文字：Blissymbols⁸⁾

表語文字：西夏文字、漢字

表音文字：音節文字：平仮名、片仮名

音素文字：アブジャド（Abjad 子音のみの文字体系）、アブギダ（Abugida 母音を付加記号などで表記する文字体系 Alphasyllabary と）、アルファベット（Alphabet 子音と母音を示す文字体系）

素性文字：ハングル（音素を調音シンボルで示す文字素を音節単位にまとめる文字体系）

日本語の音節

五十音に関するいくつかの謎、あるいは特徴を理解するための質問

1. アイウエオの順は調音に基づいたものか
2. アカサタナハマヤラワンの順は何の順
3. 半濁音はなぜハ行だけ
4. ラ行音、促音、撥音はなぜ語頭にたたない
5. 拗音はなぜ仮名2つ（1½？）で表記するのか⁹⁾
6. ファファイフェフォは拗音なのか

日本語主要音節の文字表（ひらがな）

太字がいわゆる五十音

あ	い	う	え	お			
か	き	く	け	こ	きゃ	きゅ	きよ
が	ぎ	ぐ	げ	ご	ぎゃ	ぎゅ	ぎよ
さ	し	ず	せ	そ	しゃ	しゅ	しよ（しえ）

6) 一般音声学、実験音声学、個別言語音声、音声産出、Ear Training の他に生理学、物理学、音響学、数学、情報処理学など

7) ヨーロッパ人の侵攻以前の中南米文明を伝える絵による表記

8) Blissymbolic とも。音声と関連のないシンボルのみで表記される。漢字との共通点がある。

9) これらの小さく書く仮名は、促音を表記する「っ」とともに「捨て仮名」と呼ばれた。

ぎ	じ	ず	ぜ	ぞ	じゃ	じゅ	じょ	(じえ)
た	ち	つ	て	と	ちゃ	ちゅ	ちよ	(ちえ)
だ	ぢ	づ	で	ど	ぢゃ	ぢゅ	ぢよ	
な	に	ぬ	ね	の	にゃ	にゅ	にょ	
は	ひ	ふ	へ	ほ	ひゃ	ひゅ	ひよ	(ひえ)
ば	び	ぶ	べ	ぼ	びゃ	びゅ	びよ	
ば	び	ぶ	べ	ぼ	びゃ	びゅ	びよ	
ま	み	む	め	も	みゃ	みゅ	みよ	
や		ゆ		よ				
ら	り	る	れ	ろ	りゃ	りゅ	りよ	
わ	(ゐ)		(ゑ)	(を)				
ん								

なお、ワ行はなぜ「わ」しかないのか¹⁰⁾、「くわ」「つあ つえ つお」「ふあ ふえ ふお」はどこに配置すべきか、は別の機会にゆずる。

問1：

「あいうえお」は5世紀以前の日本語の母音の音価に近いデーヴァナーガリーの母音の並びに倣ったものとされている¹¹⁾。デーヴァナーガリーでの母音の順番は不明、あるいは偶然であろう¹²⁾。

अ	आ	इ	ई	उ	ऊ	ए	ऐ	ओ	औ
a	a:	i	i:	u	u:	e	ai	o	au

【下段の長音符（：）は便宜上のもので、実音価を示しているものではない】

問2：

日本語の音節は母音のみか、子音1つと母音1つでできているが、カ行以下、サタナハマヤラワ各行の順は何を基に並べられたのだろうか。この質問の答えを導くためには、かつては濁音、半濁音は存在しなかったこと、またラ行音と濁音は語頭に立つ例が極めて少ないこと、そしてハ行音のみに半濁音がある¹³⁾ことに気付かせる。仮名文字（万葉仮名、平仮名、片仮名）が成立した時と、現在とでは音韻が異なっていること、書き言葉の道具である文字は変化が少ないのに対し、話ことば（Speech sound）はたやすく変化する。これは近代以降、録音と技術の出現によって様相が大きく変わった可能性はある。

日本語のはなしことばを書き表すにはこの平仮名（あるいはこれに対応する片仮名）があればよく、さらに若干の記号（句読点、括弧など）を用いれば読みやすくなる。日常の日本語表記には漢字などが用いられ、世界的にも特異な様相を呈しており、国民の識字率は高いと言われているが、新聞などを滑らかに間違いなく音読できるようになる年齢が意外に高い¹⁴⁾。

ともあれ、カ行以下の順を考える場合、ハ行はファ行であったことと、ラ行は分布がかたよっているこ

10) ハ行転呼音：語中のハ行音 [ɸ] が有声音 [β] となり、さらに両唇の狭窄が弱まり摩擦が消え、母音的な [w] に変化した。この変化は平安時代に始まった。またフをのぞく語頭のハ行音は [h] に弱化した：
例：かは（川）、こひ（恋）、おもふ（思）、うへ（上）、かほ（顔）

11) サンスクリットの音韻研究である悉曇学の影響といわれている。なおイ段、エ段、オ段にはそれぞれ甲類乙類の区別があったとされる。

12) ギリシャ文字やラテン文字なら a, e, i, o, u となるが、この順も不明。

13) 半濁点（゜）をカ行につけることがあるが、これは鼻濁音（軟口蓋鼻音+母音）を特記する方策である。

14) 統計資料に基づく判断ではないが、日本人の高い識字率は「上げ底」の感がある。

と、ヤ行とワ行は5段そろっていないことから、カサタナハマ行のならば方、つまり [k, s, t, n, φ, m] の順が何を反映しているかを考えればよい。

調音点：上記各音の調音点は [k]：軟口蓋 [s, t, n]：歯茎 [φ, m]：両唇

調音法：[s, φ]：摩擦 [k, t]：閉鎖 [n, m]：鼻音

調音点は声道の奥（喉に近い方）から前（唇の方）への遷移、調音法は軽い狭めから閉鎖、そして閉鎖＋通鼻、もし「アイウエオ」の行を含むと狭めの全くないものから口腔を完全に閉鎖して後鼻孔の開放に至る順になっていて、調音音声学的に大変合理的なものである¹⁵⁾。この大変合理的と思える音節のリストであるが、ヤ行、ラ行、ワ行はどんな位置づけなのか。実はこれらがマ行の後に置かれるようになったのは、やはりデーヴァナーガリーの影響と考えられている¹⁶⁾。

問3：

濁音と半濁音は固有の文字が与えられていない。ということは、仮名文字が作り出されたころには濁音そのものがなかったか、あるいは清音との違いをことさら表記する必要がなかったと考えられる。つまり濁音や半濁音は、自由異音ないしは条件異音であって、「[˙]」や「[˚]」を付す必要がなかったはずである。濁音は清音の子音である無声子音 /p, t, k, s/ が有声化したことを示す。つまり連濁・進行同化 (progressive assimilation) という音韻現象が常態化し、濁音にならないものとの区別が必要であると感じ始めた時代に「[˙]」が使われるようになった。外来語である漢字音の定着もあずかっている。

半濁音はハ行のみにあり、両唇摩擦音 /φ/ が閉鎖音 /p/ になったものである。ただ、これは通時的には弱体化して摩擦音になっていたものが、ある条件下では本来の閉鎖を保持していたものといえる。また擬音語擬態語擬情語の表記をとまなう文、あるいは上演を目的とした、読み方を明記することが必要なものでは欠かせないものになった。

問4：

ラ行音の子音は、[r] に近い発音であれ [l] に近い発音であれ、和語の語頭には立たない。これはそういうものだというしか説明ができない。英語では [ŋ] が語頭に立つことがないのと同じで、理由はない¹⁷⁾。

促音「っ」は後ろに続く音節頭子音を標準的1音節分の時間長（拍、mora）を保つことによって生じるもの¹⁸⁾であり、必ず先行する音節がある。

撥音「ん」は活用語尾「む」「ぬ」その他の助辞である音節¹⁹⁾の鼻音化によって生じたものなので語頭には立たない²⁰⁾。また語中の有声閉鎖音が鼻音化し、前接する音節として独立した例（かがみる→かかんがみる、もどり→もんどり）がある。

ただし語頭に立つものとして、「そんな」を「んな」、「それで」を「んで」と言う口語例や、方言例で

15) この子音のならば方も、サ行子音が [ts] であればデーヴァナーガリーと一致している。

16) 平安中期（11世紀）にはアカヤサタナラハマワの順に配列されたものもあった。これは正しく調音点が後ろから前に並んでいる。

17) ラ行音が語頭に立たないのはウラル・アルタイ語族に共通の特徴であるらしいが、日本語がこの語族に属していることは証明されていない。大阪大学の郡史郎氏からは、日本語では語頭と語中では子音の音価が異なることは普通であり、ラ行子音が語頭では消滅したか、あるいは他の音に変わった、という可能性の存在を無視するべきではない、とのご指摘を口頭でいただいた。

18) 実際には1拍分の長さがなくても促音知覚が生じることもあり、また1拍分以上の長さがあっても促音として知覚されないことが観察されている。

19) 行かむ→行かん、行かぬ→行かん、なるめり→なんめり、あるのです→あるんです、あんのです、ゆうれい（幽霊）→ゆうれん

20) あくまでも表記上のことである。「馬、梅」「むま、むめ」という表記の「む」が [m:] であったと考えるのは不合理ではない。

は「んだ(そうだ)」「んめー(美味しい)」などがある。

問5:

現代仮名遣いで「きゃ きゅ きょ しゃ しゅ しょ」などイ段の「き ぎ し じ ち ぢ に ひ び び み り」に「ゃ ゅ ょ」をつづけて表記する音節が拗音²¹⁾である。音素表記では各行の子音 /k g s z t d n h b p m r/ + /j/ + /a, u²²⁾, o/, (子音を C, 母音を V とすると /CjV/) とされている。ただし /zj-/ と /dj-/ それぞれに音声上の差異はなく²³⁾ [dza, dzu, dzo] または [za, zu, zo] となるとされている。

さてこの2文が「とされている」という曖昧な陳述で終わっているのは何故か。拗音の子音部分は、内省によっても確認できるが、ア段オ段の場合とは明らかに調音点をはじめ調音にあずかる口唇や舌の姿勢が異なり、イ段の場合と同じかあるいは類似している。この現象は前舌母音 [i], 硬口蓋近接音 [j], 硬口蓋摩擦音 [j]²⁴⁾などの調音姿勢である前舌 (predorsum) と硬口蓋 (palatum durum) が接近した状態に近づくもので、口蓋化 (palatalization) と名付けられている²⁵⁾。その口蓋化を引き起こす agent は /CjV/ の /j/ と見ていいのだろうか。

拗音も元をたどれば2音節が融合したものか、外来語音(漢字音)であった。中世以前の例では「けふ(今日)」→/キョー/、「しひと(舅)」→「しうと」→/シュート/、「めをと、めうと(女夫・妻夫)」→/ミョート/、「てふ」→/チョー/ などがあり、近世以降では、「これは」→/コリヤー/、「ては」→/チャ(一)/、「では」→/ジャ(一)/ などがある。これらの例では2音節が1音節になっているが、拍(モラ)数2は拗音に長音拍の付加という形で保たれているものが多い。その他の拗音はすべて外来語音か擬音語擬態語擬情語である。拗音が、元はかな書き通りの音で発音されていたとすると、その音価の遷移に説明が困難、あるいは理由付けが難しいものがある。

各例の説明

1: 「しひと(舅)」→「しうと」→/シュート/ : /ifi/ > /iβu/ > /iuu/ > /juu/

母音四辺形の中でトレースしてみるとわかるが、音価の移動距離が長くなっている。これは例外的な現代仮名遣いで「言う」と表記して /ユウ/ ないしは /ユー/ と発音することと同じ現象である。音価の移動距離が長くなるということは調音に要する音声器官の運動量が増えているのかもしれない。なぜ「わざわざ」と言えるそのような音の変化がもたらされたのだろうか²⁶⁾。「ひ」に含まれる子音 /φ/ 本来の口唇性が強く母音音価を [w] ないし [u] に引き付けたと考えられる。あるいは実際には調音に要するエネルギーは減っているのかもしれない。

2: /iu/ > /juu/ の音韻変化は説明に難くない。

3: 「めをと」→/ミョート/ では /ewo/ > /joo/ であり、/j/ の由来が不明である。/e/ が元は [je] であったと言えるのだろうか。また「めうと」→/ミョート/、「てふ」→/チョー/ では /eu/ または /eφu/ > /joo/, [e] が [u] の持つ後舌性に同化して [o] に、また [u] が [e] の [-狭口] に同化して [o] になったのであれば reciprocal assimilation の一例であろうか。

4: 「これは」→/コリヤー/、「ては」→/チャ(一)/、「では」→/ジャ(一)/

これらの例の末尾拍「は」は /wa/ である。この音節頭の /w/ には強い唇音性はないはずである。

21) これらを開拗音、「くわ、ぐわ」を合拗音と言う。ここでは前者のみを論じる。

22) ウ段母音は [u] [u] [i] などの異音があるが、ここでは [u] とするが、異音の存在を否定するものではない。

23) 「じ」と「ぢ」の頭子音はともに破擦音 [dz] または摩擦音 [z] である。どちらになるかはほぼ環境によって決まる条件異音であるが、語頭の場合は自由異音であることもある。なお [z] は便宜上 [ʒ] と表記することもあるが、別の音である。

24) 日本語に [j] が存在するかは疑問。[z] であろう。

25) 口蓋化には舌の姿勢の他、口唇を水平に引く [i] の調音に伴う動きも含まれる。

26) 他言語(例えば朝鮮語)の影響の可能性も排除できない。

また口蓋化を促すような素性も持っていない。

もう一つ、可能な説明は *euphony* と *cacophony* という概念を使うものである。*euphony* とは耳に心地よい音、*cacophony* は耳障りということである。ただし「えふ」などと仮名2文字それぞれであらわされる音が続けたものが耳障りで、拗音+長音となったものが耳に心地よいと言えるだろうか。

拗音という名前は「拗れた音」からつけられている。実際には音価の異なる2拍の母音が連続している「重母音」が硬口蓋近接音である [j] + 単一音価の1拍あるいは2拍の母音、つまり「直母音」に変化したものであるから、現象のとらえ方としても疑問が残る。ただ、撥音の名も、音声現象としてではなく、表記するかな文字「ん」あるいは「ン」の終筆が、撥ねる形になっているからであり、拗音の命名も同じく表記に基づいている。イ段のかな文字で始まりア段、ウ段、オ段の仮名で終わるから「拗れて」と解釈するのである。

拗音がねじれているかまっすぐかは解釈の仕方によるだろうし、また好みの問題かもしれない。普通に日本語を母語として使っている者にとってはどうでもいいことだろう。だが日本語を第2言語として教える立場にたったり、言語の分析や類別などに関心を持ったりすると、拗音を /CjV/ と分析することに居心地の悪さを覚えてしまう。

日本語の音節構造は /CnV/ で、n は 0 か 1 である、とされている。「あいうえお」は n=0。カ行以下濁音半濁音を含むマ行までは、それぞれの子音1に「あいうえお」のいずれかが付く。ところがヤ行の子音は単独では「あうお」にしか付かない。そして拗音節 /CjV/ では子音+ヤ行子音+/a, o, u/ という例外的な子音連続を認めている。なぜ /j/ だけ子音の例外として他の子音とのクラスター結合を認めるのだろうか。「/j/ は半母音だから」といって認められるわけでもない²⁷⁾。

第6~8の母音として

50音図にもう一度目を向けてみると、ヤ行にはイ段とエ段が抜けている。一方拗音はすべての行で「や、ゆ、よ」の段を満たしている。ではア行に拗音はあるかという空白になっている。それならア行を8段にして「あいうえおやゆよ」をすべて母音とすればさきわめて整った表になる。「や、ゆ、よ」を母音とすることに抵抗を感じる向きもあるが、音声学的には非成節母音 /j/ と音節主音となる /a, u, o/ の組み合わせ合わせた上昇二重母音²⁸⁾であるとするに、何の問題もない。二重母音の定義は「一音節内で音価が変化する母音」であり、従来「日本語に二重母音はあるか否か」と問う議論のほとんどは、「『愛』『問』などが連母音か二重母音か」に類するもので、「発話速度によっては」とか「丁寧な発音では」などの議論を展開している。また日本語の発話リズムは拍（あるいはモラ）が主単位となっているとし、重母音と連母音との差異を拍感覚で1拍か2拍かで決めようとしたりもする。拗音は1音節で1拍、長音が続いて引き延ばされれば1音節2拍である。ぞんざいな発話であっても丁寧な発話であっても常に1音節である²⁹⁾。

百音図

8段×13行-5(ぢ づ ぢゃ ぢゅ ぢょ)+1(わ)=100音節
あ い う え お や ゆ よ

27) 合拗音「くわ、ぐわ」の /w/ はさらに分布が限られている。

28) 英語やドイツ語で二重母音と言えば前部が音節主音で後部が非成節音の下降二重母音である。非成節部に記される音声記号は、あくまで心理的な音色変化の到達目標であり、通常はその音価が現れることは稀である。例えば(英) eye は /ai/ の最終部の音価はほとんどの場合 [ɪ] はおろか [e] にも達していない。

29) チョコレートが6拍であったらパイナップルと同じで、階段のゲームにならない。(cf. グリコは3拍)

か	き	く	け	こ	きゃ	きゅ	きょ
が	ぎ	ぐ	げ	ご	ぎゃ	ぎゅ	ぎょ
さ	し	す	せ	そ	しゃ	しゅ	しよ
ざ	じ	ず	ぜ	ぞ	じゃ	じゅ	じょ
た	ち	つ	て	と	ちゃ	ちゅ	ちよ
だ	(ぢ)	(づ)	で	ど	(ぢゃ)	ぢゅ	ぢょ
な	に	ぬ	ね	の	にゃ	にゅ	にょ
は	ひ	ふ	へ	ほ	ひゃ	ひゅ	ひょ
ば	び	ぶ	べ	ぼ	びゃ	びゅ	びょ
ぱ	ぴ	ぷ	ぺ	ぽ	ぴゃ	ぴゅ	ぴょ
ま	み	む	め	も	みゃ	みゅ	みょ
ら	り	る	れ	ろ	りゃ	りゅ	りょ
わ							
ん							

問6:

拗音とは仮名表記から名付けられたものであることは既に述べた。仮名表記の「フ」はウ段であり、別の段である「ア、イ、エ、オ」の文字につながるので拗音だと言える。同様に先の五十音図にあった「しえ、じえ、ちえ」も拗音³⁰⁾、さらに「つあ、つい、つえ、つお」も拗音である。ただ考えておきたいのはこれらを拗音として日本語の一般的な音節に加えることの妥当性である。「つあ、つい、つえ、つお」も例は少ないが出現が外来語に限られているわけではない³¹⁾。それにもかかわらず五十音図に採録されることは稀である。この他「ティ、デイ、トゥ、ドウ」についても同様のことが言える。

「ファ、フィ、フェ、フォ」の頭子音は上代のハ行音である両唇摩擦音 [ɸ] として発音されており、現代のハ行音では隔たりが大きい外国語音の唇歯摩擦音 [f] を映すために用いられている。

日本語音のレパートリー

現代日本語は大和言葉に多くの漢語と漢字由来の造語によって上代日本語にはなかった音節を使用するようになった。発音自体も時代とともに変化した。またポルトガル語やオランダ語から借用した語彙もあったが、特にカタカナで書き分けることもなく、日本語の音韻のなかに溶け込んでいった。明治以降は英語をはじめとする外来語の語彙と外国語音に似せた音が用いられるようになったが、江戸期までとは異なり、カタカナ表記によって西洋語からの借入であることを視覚上も明示して区別するようになった。この時期に用いられたキ、ブなどの仮名遣いは定着しなかった。また英語の他、ドイツ語、フランス語、ロシア語などから借入した語も増えた。第2次世界大戦後はアメリカ英語の語彙が大量に流入した。しかしどの借入語においても、語音を構成する単音は旧来日本語で使用されているもので間に合わせており、新たな単音が使われ始めたということはない³²⁾。しかし単音の新しい組み合わせ方は生まれた。前節で述べた

30) 17世紀までのサ行音「しえ、じえ」は九州地方の方言音として現存している。

31) 促音を伴う形ではあるが、「とつつあん」、「ごつつおおさん」などに現れるが、表記では「つあ」「つお」となることが多いかもしれない。「つえ」は「ツエツエバエ」「ツエツベリン」など外来音であるが「一膳飯」を「いっつえんめし」と発音した例もあった。

32) 音価そのものの変化は観察される。古くはハ行音の唇閉鎖音から両唇摩擦音を経てほとんど無声母音と言える調音点の不明確な /h/ への変化、音便、濁音の導入、/b, d, g/ の前鼻音の消失、「じ」「ず」「ぢ」「づ」の中和など。最近では歯茎音の歯音化、母音間 /b, d, g/ の摩擦音化、鼻濁音 /ŋ/ の消失などがみられるが、新たな音素は観察されていない。「あゝ」などは表記のみであり、現実の発音を表しているものではない。

拗音と認める「新しい」拗音がそれである。

近時の日本語は変化が激しいと思われているが、音声のレパートリーが増えているという印象はない。これは外国語音を取り入れようとの意識がそれほど強くないからではないだろうか。筆者が小学生の頃、外国映画は字幕付きが普通で、日本語は邦画とニュース映画だけであった。テレビの連続ドラマも見ごたえのあるアメリカのものは字幕付きの英語であった。ラジオから流れるヒット曲は英米仏伊のものが多く、歌謡曲や演歌よりはかっこいいものと思っていた。今は外国語音に触れる手段は多くなっているのに、その再現はあくまで仮名レベルであり、仮名で書いた途端に日本語の音韻の枠に収まってしまう。たしかに「エヴァンゲリオン」「よゐこ」のような文字での遊びは行われているが、それが音声の多様化に至る例は少ない。そういえば「拗音」という概念も文字から産み出されたものであった。

(2016年10月31日)